

なごし はらえ
夏越の祓

第2話

— マントヒヒと一緒にスワンに乗った日 —



志間 悟

Graphic : ONAKA

七月に入つて梅雨前線が北上し、夏の日射しが街のビルを照らし始めたころ、ぼくは退院した。

医者が確約したように、ぼくの躰はほぼもとの状態に戻った。「ほぼ」というのは、片方の腎臓と右肺の半分が失われたために、激しい運動ができなくなったから。けれど、骨折した部位は完治し——腰骨には数本ボルトが入っているんだけれど——リハビリのインストラクターさんのおかげだろう、歩行補助具——正確にはエルゴグリフクラッチ。肘から先、二の腕で体重を支えられるようにできた杖——を持ってだが、歩けるようになっていたし、ぎこちないけれどキャッチボールもできる。日常生活においては支障がないまでに回復した。

定期的に通院し、経過を注視する必要があったが、退院の運びとなった。結局、五十日以上あった有給休暇だけでは足りずに、まるまる二ヶ月間もの入院生活であった。

母が退院に付き添うと言ったけれども、お世話になった人に配る菓子折の調達だけお願いして、「もう大人なんだから」と断った。

仲良くなったリハビリのインストラクターさんや冗談を言つて和ましてくれた婦長さんとの別れは、やっぱりちよつと寂しかったけれど、笑顔で退院することにした。彼らの好意を無為にするようなことはできない。意識して頬の筋肉を持ち上げて、笑顔、笑顔。

トイレの鏡で笑顔の練習をして、クラッチを突きつつ、まずは巡回診察前の主治医に挨拶に行った。続いてナーセンターやリハビリルームを巡つてお菓子を配つて……。自然とお礼の言葉が出た。『助けてくれてありがとう、ここまで元氣になりました』。けれど反面、『何で助けたんだよ』なんて気持ちも奥底にはあった。

もうひとつ本心を言うと、アパートに戻つて独りになることが恐かった。独りになると壊れてしまうかもしれない。病院に居れば、第三者の目があつた。その目らが、ぼくを四方から支えてくれていたのだ。独りになること、それは支えを失うことだ。

強くなれというのか？

腰骨のボルトは医師がつけてくれた。こころのボルトは自分でつけるということか。

吉祥寺駅を出ると「娑婆に戻った」という感じがした。否応がなく日常がリスタートされた。

ちようどお昼時であつた。ハーモニカ横町の生スパゲティ屋さんでカルボナーラを食べた。些細なことがあらためて「生きていること」を実感させてくれた。ぼくは食べて排泄して、生きて行くのだ。

井の頭公園では、スワンのボートが数隻ただよっていた。

夏休みに入ったのか、漕いでいるのは大学生のカップルが多いようだ。水面に初夏の清々しい日射しが乱反射するとともに、周囲の緑が映りこみ、絶好のデート日和だ。ぼくも遙佳とスワンに乗ったことを思い出した。

井の頭公園には変な言い伝えがあつて、井の頭池に祀られた辨財天べんざいてんが仲の良い男女を妬み、ボートに乗ったカップルにまじないを掛けて別れさせてしまふとか……。しかし、ちゃんと辨財天にお参りすれば逆に結ばれるとか……。ぼくらは、「一応行つておくか」つてかんじでお参りしたのに、結婚することは叶わなかった。辨財天さんの神通力をもつてしてもぼくらの別れは回避できないものだったのか……。

明るく楽しいはずの想い出がすべて陰鬱な思考への入り口になつてしまふ。いつかそういつた畏にも馴れて、明るく楽しい面だけを胸に、暖をとるようなことができるようになるのであろうか。——そうか、これがこころのリハビリ、こころのボルト付けということなのだ。

しかし、すぐには無理だ、どうしたつて。

井の頭公園の南側、辨財天の参道を降りていったところにぼくの暮らすアパートがある。ユニットバス付きワンルーム。東南に面し、陽当たりの良さだけが唯一の取り得の部屋だ。

久しぶりに戻つた。母が掃除してくれたのだろう、ゴミな

ど片付いており、整理整頓されていた。冷蔵庫を開けると何も入っていない。コンビニでペットボトルのお茶でも買ってくれば良かった。まあ、良い。すぐに出かけるつもりだった。備え付けのクロゼットを開き、背広に着替える。黒いネクタイを一度手に取り、迷つて地味なものに替えた。ネクタイの結び目を見ようと扉に付いた鏡をのぞき込むと、鏡に見慣れない段ボール箱が映つていた。

ベッドの横にあつたその段ボールを開けてみると、東京と群馬の地図本、ヒットソングを集めたコンピレーションCDのセット、ガソリンスタンドのクーポンチケット、そして、遙佳が最期に手にしていたマントヒヒの縫いぐるみ——チークスがこちらを見ていた。

遙佳の呼び声が聞こえた気がした。「ゆうすけさん」と、確かに。

——わかつたよ。今、会いに行くから。

ぼくは段ボール箱にあつたCDセットから一枚を抜き、クラッチを片手にアパートを出た。

京王井の頭線、井の頭公園駅から渋谷を經由し、東急東横線の都立大学駅まで、乗り継ぎがうまくいけば四十分そこそこの道のりだ。そこから大岡山の遙佳の実家までは、クラッチを使つてでもそう苦になる距離ではない。

CDウォークマンで、段ボール箱にあったコンピレーショナルバムを聴きながら、車窓に流れる街並みを見るとはなしに見ていた。

乗っていたシビックが廃車になって、その時処分に当たった業者さんが車内に残された私物を段ボールで送ってくれたと母が言っていたことを思い出した。命まで失なわれる事故だったのに、CDが割れずに残っていたなんて皮肉な話だ。

そしてチークス。遙佳と誕生日が同日のマントヒヒ。そもそもチークスは遙佳へのプレゼントだったから、ぼくに残された遙佳の遺品ということになる。

思い出だけでもあまし気味なのに、遺品などがあつたら、さらに鬱のスパイラルにはまり込む。

けれど、あのチークスを見たとき、不思議と温かい気持ちになった。むしろ、癒されるような気がした。だから、遙佳の呼び声が聞こえたような気がしたのかも。——いや逆に、遙佳の呼び声が聞こえたから、チークスに快い気持ちを抱いたのかも知れない。

八〇年代の懐かしい曲が、がんがん鳴っていた。

昨日、退院してすぐに焼香にあげたいと、電話でお願いしたところ、快諾の返事をいただいていた。しかしいざ、

『川野』と書かれた表札の前に立つと、一気に沈鬱な気持ちになった。遙佳の実家には楽しい思い出しかない。その明るい光景が反転し、ネガフィルムのように暗い暗い映像となつてよみがえるようだ。

気がついたら深呼吸していた。いや深呼吸というよりは大きな溜め息に近いかも。気持ちを整理して、チャイムを押した。

ウィークデイの日没前、家に居たのはお母さまだけであつた。

「あら、ひとりで来たの？ 大丈夫なの？」

途中渋谷で買った菓子折を手渡し言った。「ずっと入院している、甘えぐせが付くようではないけません」

川野家にひとつだけある和室に通された。十二畳はあろう広いリビングの一区画が一段高くなっていて、そこに畳が敷かれていただけであるから「和室」とは言えないかもしれない。しかし、お父さまはここを「おれの書斎」と呼んでいる。そこに仏壇が入れられていた。以前にはなかったものだ。

仏壇の観音扉は開けられており、鐘だの蝋燭立だのがどこか可愛らしげに並んでいる。

「遙佳……」

義理の母親になるはずだった彼女が仏壇に飾られた遙佳の写真に呼びかけた。そして、マッチを擦って蝋燭に火をつけ

る。

「祐介さんがいらしたわよ」

写真立ての中に、とびっきりの笑顔の遙佳がいた。

——言葉が出なかった。

ぼくは、線香を二本つまみとり、炎にかざして火をつけた。そして、線香立に刺して、両手を合わせた。

遙佳の死は、既に理解しているつもりだった。しかし、遺影に手を合わせるという行為は、「理解」とか「納得」とか、頭だけで処理された行為を一蹴する生々しさで、強烈にぼくを打ちのめした。

遙佳は死んだ。もうこの世にはいない。

「……ごめん。遙佳！」

遙佳の死から逃げていてはいけけない。そう思つて、退院しやすく焼香を、と考えたのであったが、——ぼくは弱い。またしても彼女を失つた現実直面して、砕け散ってしまった。ぼくはその場にへたり込んだ。震えが止まらなかった。そして、しゃくりあげて泣いていた。

優しく肩を抱かれた。「祐介さん……。いっぱいお泣きなさい」

彼女は言った。「泣いて泣いて、泣いた分だけどんどん強くなるから、優しくなるから」

ぼくの背中をおおい込むように、お義母さんはじつと抱い

てくれた。線香の香りが甘酸っぱい不思議な温かさを鼻腔の奥に伝えていた。

お義母さんがコーヒを入れてくれた。リビングに移つて、ぼくの買ってきたお菓子折りをあげ、お義母さんとお茶をした。

「そんな泣きはらした目をして外を歩けないわよ」

ごもつとも。ぼくはコーヒをいただきつつ気持ちを落ち着けた。

リビングからは仏壇の遙佳の顔写真が見えていた。それを見てお義母さんが話してくれた。

「遙佳は強い子だったわ」

「……強い子？」

「祐介さんには、女の子っぽい一面しか見せていなかったかな？」

遠くを見るような表情で続けた。

「ヴァイオリンの、音楽の方の仕事が叶わなかったとき、あの子、切り替えが速かった。逆境にめげない、根性みたいなもの、持っていたわ」

「そう言われれば、芯が強いというか……」

「そうでしょ？ 結婚したら、尻に敷かれていたかもよ」

「かも知れませんか」

「あの子、今ごろ天国でも……、自分の居場所を探して、がんばっているような気がするわ。だから、祐介さん、あなたも遙佳に負けないように、がんばってもらわないと」

「そうですね」

「——ごめんなさい。がんばっている人に『がんばって』って言うのはいけないことだったわ」

「そんな……」

「あたしが言いたかったのは、あたしが祐介さんを応援しているってこと。応援するとき言うでしょ、『ガンバレ』って」

帰りの電車の中、ウォークマンからヘッドセットを伸ばし、コンピレーションアルバムの続きを聴いた。プリンスが流れしてきた。

車中のひとはみな思案顔だ。街を往き来するたくさんの人々が、それぞれに悩みを抱え、多かれ少なかれ、もがいている。お義母さまの——いや、まったくの他人だけれど——柔らかい掌のぬくもりが両の肩に残っていた。ひととひとのつながりって何だろう？ 傷つけ合い、助け合い、泣きながら、笑いながら、みな生活している。——生きている。

「Let's Go Crazy〜」とプリンスが陽気に歌う。たぶん、ぼくを励ましてくれている、『ガンバレ〜』って。

井の頭公園駅に戻ると、夕焼けが街をオレンジ色に染める時刻だった。コンビニで夕飯と翌朝用のパンとそれからペットボトルのお茶と缶ビールを買って帰った。退院して、まずしたいことのひとつがアルコールを飲むことだった。こんな夏の日にはビールだろ。

アパートの部屋に戻ったとたんに、声がした。遙佳の声だった。

「ゆうすけさん、あけて。だして！」

クラッチとコンビニの袋を玄関に置いて、部屋に上がった。声の出どころをさがす。

「……ゆうすけさんでしょ。……ゆうすけさん！」

ベッドの横の段ボール箱からだった。

何なんだ？ なぜ段ボール箱から遙佳の声がする？ 中にはレコーダーのような物が入っていなかった。何かの仕掛けだろうか。段ボール箱を開けた。

「ゆうすけさん？」

声はマントヒヒの縫いぐるみから聞こえるようだ。何かのサプライズか？ おそろおそろ縫いぐるみを取り上げた。ぐりりと見回してみる。裁縫をし直した後があるかよく見たが、縫い目は依然と何らかわらないようだ。

「チークス？」

「はるかです！」

「遙佳？」

「ちーくすって……。まんとひひのぬいぐるみじゃない」

「そうだ、マントヒヒの縫いぐるみ。チークスが声を発するわけがない。しかし確かに、この柔らかいふかふかの縫いぐるみから声が、遙佳の声が聞こえてくる。胴体や頭部を押して、内に何かエレクトロニクスのような細工が仕込まれてないか探したが、手応えはない。重さも変わってはいないようだ。」

——何かが起きている。

何とも間抜けな質問が、ぼくの口からこぼれた「何で？」

「なんでって？ わたしがしりたい」

混乱した。

「おもいだした」

「……何を？」

「かーらじおから、かーでいがんずのきよく……。ゆうすけさんがおしえてくれた、『まい・ふえぱりつと・げーむ』」

「そうだ。そうだった」

「しきのうちあわせは？」

——何かが起きている。

「しろいおおきなくなるまがつっこんできた」

——何か。普通じゃない何かが……

「……じこが、おきたの？」

……起こっている。

「ねえ、わたし……」

——幻聴か。

焼香が、写真立の笑顔の遙佳が、そんなにもシヨックだったのか。いや、確かに辛いことではあったけれども、それは自分が望んだことで……。

「わたし、からだのかんかくがないの。じゅうしようなのね」

「重傷は僕の方だ。幻聴まで聞こえる」

「げんちよう？」

「君の声が聞こえる」

「しゃべってるもの。きこえるように、しゃべってるの！」

——疲れが出たのかも。退院した当日に、電車に乗って出かけるなんて、まだ早かったのだ。ぼくはチークスを両手に抱えてベッドに横になった。

でも幻聴は——胸に抱えたチークスは——容赦なく話しかける。

「ねえ、なにがおきたの？ はなしてよ」

自分自身が、まだ事故のことを克服できていないのだ。だから幻聴がそれを問いたです。

「事故で僕は重体。遙佳が亡くなった」

「やなじょうだん！」

「冗談だったらって、ぼくもそう何度も願ったよ」

「ゆうすけさん、だって、けがしてない」

「あれから二ヶ月も過ぎたんだ。今日、退院したんだ」

チークスからの声が止まった。

そう、冗談だったらって、何度も祈ったんだ。悪い夢なんだから。そして、いつかこの悪夢から覚めるんだって。

この状況は、その悪夢のなかで、さらにまた悪い夢に引きずり込まれたようなものだ。

ぼくはチークスをベッドに置いて、立ち上がった。

幻聴に付き合っていない。風呂入って、ビールを飲んで、メシ食って……。さっさと寝てしまおう。感じている以上に疲れているのだ。

「まって。かがみをみせて」

ぼくは、振り返りマントヒヒの縫いぐるみを見た。

「わたしがどうなっちゃったのかしりたいの！ こわいけれど、かがみをみれば、わかるとおもう」

いいだろう。遙佳の声で話すこの縫いぐるみに鏡を見せてやろう。

ベッドからチークスを拾い上げ、クロゼットを開ける。内側にある鏡をチークスに見せる。そして、持った手首をひね

って、こんどはぼくの顔を。

「どう？」

「もういちど」

ふたたび手首をひねって、鏡に向ける。

「これがわたし？」

「そうだよ」

「わたし、ちークすにはいつちやっただ」

「え？」

「じょうだんでもこんなことできつこないよね」

——何を言っているんだ？ //

チークスに入っちゃった？

た？

「じこのしゅんかんに、わたし、このぬいぐるみにはいつちやっただ。わからないけれど、ひよっとしたら、からだをなくして、いきばしよをさがして、このちークすに……」

——ちよつと待てよ。何を言っているんだよ。

「けど、わたしはここにいて」チークス／遙佳が訴えた。

「——なう・あいむ・ひあ——」

『Now I'm Here』——遙佳が好きだったクイーンの曲だ。ブライアン・メイのエレキギターがテープエコーでぐるぐる回り、フレディ・マーキュリーが「ほら、ぼくはここにいて」と歌い上げるブリテイッシュロックの金字塔的名曲。七十年

代当時、クイーンはノー・シンセサイザーをモットーとし、ギターのみで重厚な音像をつくったバンドだ。

——つてことは、幻聴は、ぼくの”

遙佳に生きていてほし

いという願いを呑んだかたちで実現させた結果なのか？

「ひとりにさせて」とチークス／遙佳。

ぼくはチークス／遙佳をベッドに腰かけさせ、ユニットバスに向かった。ぼくもひとりで考えたい。何が起きているのか？

玄関に放置してしまった缶ビールやペットボトルを冷蔵庫にしまい、ユニットバスに向かった。

熱いシャワーが、お義母さんの言葉を思い出させた。

「遙佳は強い子だったわ」あの子、今ごろ天国でも……、自分の居場所を探して、がんばっているような気がするわ……」

もし、本当にチークスの中に遙佳が、遙佳の魂が宿っているとしたら——

自分の体がマントヒヒになったなんて、誰でもショックだろう。鏡を見せるなんて、ひどいことをしたのかもしれない。

——いや、そもそもが幻聴なんだ。『Now I'm Here』というのも、ぼくの記憶が聞こえさせた言葉である可能性がある。

くだらないバラエティ番組を見ながらビールを呑んだ。なんか美味しくなかった。幻聴のせいだ。

弁当のから揚げをほおぼろうとしたときだ。

「しょくじちゅうにごめんなさい」

ベッドの上のチークス／遙佳が話しかけてきた。

「かーでいがんずつて、どこのくにのぼんどだかしつてる？」

無視して、から揚げをほおぼり、咀嚼。ビールをひと口、嚥下。

「むししないで！ かーでいがんずはどこのくにのぼんどでしよう！」

「スウェーデンだろ」

「……せいかい。さすがにしつてたか」

チークス／遙佳はぼくがベッドに置いた形のまま、目の前のクロゼットに向かつて座っている。どう見てもただの縫いぐるみだ。なのに、間違いなく声を発している。幻聴とは思えない。

「じゃあ、くいず、そのに」

チークス／遙佳は続けた。

「しんいちろうに皆さんの、はつこいのひとのなは？」

「そんなの知らないよ」



「いずみちゃんだよ。もりやいずみ。いずみちゃん、しりつ
のちゅうがつこうにすすんで、あえなくなっちゃったのよ」
テーブルの上に携帯があった。充電中だったそれを手に取
り、川野家に電話を入れた。

「今晚は。ああ、お義母さん。今日はどうもありがとうござ
いました」

幸い、真一郎さんは帰宅していた。代ってもらう。

『やあ、退院おめでとう。こんどゆっくり酒でも飲もう』

「あ、はい」

『で、何？』

「変なこと訊いてすみません」

『うん？』

「真一郎さん、初恋のひとの名前覚えています？」

『何、急に』

「すみません」

『……いずみちゃんていったかなあ』

「いずみちゃん？」

『うん』

「もりやいずみ？」

『ああ、姓は「森谷」だった』

「すみません。昔、遙佳さんが話していたのを思い出して」

『変なヤツだなー』

「こんど飲みましょう。お義父さまにも、よろしく……」
携帯を切り、チークス／遙佳を見た。

「なう・あいむ・ひあ」とチークス／遙佳は言った。
幻聴ではないらしい。

ぼくの記憶から出てきた事柄ではなかった。遙佳でしか知り得ない情報……。

超自然的な現象が起きている。マントヒヒの縫いぐるみ、チークスの内に遙佳の魂が宿っているのは、曲げようのない事実であるようだ。

確かに躰は失った。しかし意識／魂はチークスの中に入り、消失を免れたのだ。

つまり——遙佳は生きている。チークスの中で、生きている。

そんなことはあり得ない。理性はそう言っている。しかし、事実を客観的に積み上げると、遙佳の意識、遙佳の記憶がチークスに宿ったということになる。

狂いそうだった……。

—— Let's Go Crazy

プリンスのフレーズが頭の中でリフレインした。

それは「狂気を怖れるな」と励ましてくれているようにも思えた。総てを認めよう。現実を疑い、拒否してばかりいて

は前に進めない。強くならなくちゃ。ここにボルトをつけるのだ。いったん総てを是とし、受け入れよう。

ビールを一口飲み下した。冷たい炭酸がのどを洗い流していく。

そして、よろこびと大きな安堵感がわき上がってきた。遙佳は死んでいない——。

躰が失われたことを考えると複雑な気持ちではあるが、ぼくのそばにいて話しかけてくれる——そのよろこびの方が断然勝っていた。

次の日も快晴。井の頭公園に行った。

ひとりでスワンボートに乗ると言うと、受付のおじさんにはっこりと笑った。たまに、ひとりで物憂げにボートを漕ぐ若者がいるのだ。その同類と思われたのに違う。

スワンボート同様の自転車ペダルを使ったリハビリもあつたので、ボート漕ぎはわりと楽だった。池の中ほどまできたとき、横に置いたリュックから遙佳を出して、木々が見えるように座らした。

「きもちいいー」

ぼくはボートをゆっくり漕いだ。

「すっかりなつだねー」

退院してふつか目。ぼくがマントヒヒ——いや、遙佳——

と一緒にスワンに乗った日は、夏の陽光が井の頭池にきらめく日だった。

「辨財天さんにお礼言いに行こうか」

「おれい？」

ひよっとしたら、やはり辨財天さんの神通力が、ぼくらの別れを寸前のところでぐいとめたのかも知れない。

「——そうか。うん」

へっくくく